

初級からの専門日本語教育のカリキュラム・デザイン

外交官・公務員日本語研修における専門語彙・スピーチクラスの実践

羽太 園・和泉元 千春・上田 和子

はじめに

関西国際センターで実施されている外交官日本語研修・公務員日本語研修（以下、外交官・公務員日本語研修）は、9ヶ月間の専門日本語研修で、毎年40名程度の若手外交官と公務員を受け入れている。そのほとんどがいわゆるゼロ初級者だが、研修参加者は研修修了後、在外公館で、あるいは自国で日本に関係する職務につく可能性が高く、職務の遂行は日本語学習の動機付けと強く結びついている。

いわゆるゼロ初級者の研修参加者が外交や政治、経済といった専門性の高い日本語を学ぶのに9ヶ月という期間は決して十分とはいえないが、学習者の言語能力がある程度上達するまで専門的な技能や語彙の導入を待つという方法は、Grabe & Stoller (1997) が指摘するように非現実的であるばかりでなく、研修参加者のニーズ、興味や認知レベルを無視することになる。そこで本研修では、初級段階から専門性を打ち出した技能科目を設定し、同時に科目間の〈内容の連携〉と学習者による〈話題の選択〉により、必要な分野の日本語をより少ない負担で学習できるよう試みた。

本稿では、初級段階からの専門日本語教育の一例として、外交官・公務員日本語研修における専門語彙クラスとスピーチクラスのカリキュラムデザインを紹介し、同時に実施後に行った聞き取り調査⁽¹⁾の結果をもとに学習者がこの試みをどのように受け取ったかを報告する。

1. 専門性を取り入れた技能科目と選択システム

本研修では日本語の基礎作りをしながら、4ヶ月目以降は「読解」「聴解」「語彙」「スピーチ」などの技能科目を選択科目として設置し、研修参加者自身がニーズを考え優先順位をつけながら選択できるよう配慮してきた⁽²⁾。さらに平成11年度からは科目の選択だけでなく〈進度〉の選択、政治や経済などの〈話題〉の選択も同時に行えるよう履修科目選択システムを実践した。また技能科目間で学習内容を共有させ、〈科目間の内容の連携〉も試みた。聞き取り調査では数名の研修参加者が「複数の選択科目を履修したことで学習が相乗的に効果を持った」と評価している（上田他 2001）。

ただし科目間の内容の調整が不十分であり、また選択時に〈科目間の連携〉について明確な説

明を行っていなかったため、履修した研修参加者の一部だけがその学習効果を意識したにとどまった。また「たくさんの選択科目を履修することは役に立つ」と学習意欲を覗かせながらも「余裕がなくて多くを履修しなかった」と、このシステムが研修参加者の負担に十分配慮できていないことを示唆するものもあった。

そこで平成12年度は、平成11年度の実践に基づき以下の3点に配慮して見直しを図った。

さらに細かな内容の選択肢を設置する（ 研修参加者の興味とニーズへの対応）

選択科目間の連携を強化する（ 効果的な学習と負担の削減）

上記2点について研修参加者への事前説明を徹底する（ 学習効果の意識化）

以下に実践例として専門語彙クラスとスピーチ&プレゼンテーションクラスを挙げる⁽³⁾。

2. 実践例 専門語彙クラスとスピーチ&プレゼンテーションクラス

2.1 専門語彙クラスの概要

外交官や公務員の職務遂行に必要な日本語力を獲得するためには、基本文型習得と合わせて経済、政治、外交といった専門語彙の習得と、日本語語彙の分析、特に造語力の習得が必要である。そこで、2学期（1～3月）と3学期（4～6月）に週1回（2時間）専門語彙クラス（以下「語彙クラス」）を設けた。語彙クラスでは、業務に関連する専門語彙を分野別に提示するとともにその中で接辞や品詞転換、縮約形などに着目させ、日本語語彙の分析と応用力の養成を狙った。

平成11年度の聞き取り調査では履修者の多くは職務に直結する内容についての学習に満足感を得ていたが、「集中的に語学を学習する場合語彙はその中心となる」と語彙拡大という技能の必要性を感じながらも「難しいので研修修了後の課題としたい」と優先順位を低く捉えたり、「文法クラスに即した一般的な語彙が勉強したい」という声が聞かれた。

そこで平成12年度は2学期に一般的な語彙を扱う時間を二回設け、また3学期は一般語彙コースと新聞語彙コースの2コースを設けて研修参加者が興味とニーズに即して語彙の拡大ができるよう配慮した。一般語彙コースでは、語彙クラスの目的の一つ＜漢語を中心とした日本語造語力の養成＞の重点を軽くし、文法クラスで十分に扱えなかった語彙を含む社会文化に関する語彙を取り上げることとした。

2.2 スピーチ&プレゼンテーションクラスの概要

外交官や公務員にとって、フォーマルな場でのスピーチや観光や投資についてのプレゼンテーションは業務の一部であり、またスピーチという形をとらなくとも日本人との社交の中で自国の社会文化を説明する機会は多いため、自国説明という言語活動に強い興味と情熱を持っている。

同時にスピーチを書き発表するという活動は、既習文型や語彙を使った文章構成の絶好のトレーニングとなる。

そこで、語彙クラスと同じく2・3学期にわたって週1回（2時間）スピーチとプレゼンテーションクラス（以下「スピーチクラス」）を設置した。スピーチクラスでは、毎回1つのテーマでスピーチ原稿を準備し、他の参加者の前で発表し、ビデオに録画し、互いに評価しあうという形をとっている。そこではテーマ別の語彙や表現を習得し、同時に話法やプレゼンテーションの技術といったスピーチの技能を身につけることを目標としている。

平成11年度の聞き取り調査では、履修者は「短い時間に多くを学ぶことができた」と評価しているが、「準備に時間がかかって他のことができなかった」という声も聞かれた。また3学期に入り、経済や社会問題などのテーマを扱うようになると「大切なテーマだが、語彙がむずかしい」「新しい語彙をすぐ使うのは大変」と語彙がハードルになっていたことをうかがわせた。また「経済は興味がない、文化的な話題がよかった」とテーマが合わずに選択しないケースもあった。

スピーチクラスはクラス活動の負担が大きい科目だけに、参加者がテーマに興味と必然性を感じることが非常に重要である。また外交官や公務員にとっては社交も業務の1つであり、日常的話題も関心の高い分野と考えられる。そこで平成12年度は3学期からテーマを文化・社会コースと経済・社会コースに分け、興味のある話題を選べるよう選択の幅を広げるとともに、語彙コースと内容を連携させることで語彙学習の負担を軽減するよう試みた。

2.3 語彙クラスとスピーチクラスの連携

語彙クラスとスピーチクラスではそれぞれが目指す〈技能〉と〈内容〉が重層的に学べるよう、以下の点でカリキュラム調整を行った。（表1、表2）

2学期の段階では、両科目で話題は連携させないが提出する語彙を可能な限り重複させた。

3学期は、経済・社会コース（スピーチ）と新聞語彙コース（語彙）、文化・社会コース（スピーチ）と一般語彙コース（語彙）と、それぞれ2つに分けたコースを〈話題〉で連携させ、また語彙や接辞の提出も連続して取り扱うよう〈内容の連携〉に配慮した⁽⁴⁾。例をあげると、「景気」を話題とした語彙クラスで「～率」「不～」という接辞を学んだ後、次の週に「経済と人々の生活」を話題としたスピーチに「失業率」や「不景気」といった語彙をとり入れる、また語彙クラスで「ことわざ」を学んだ後、ことわざを使って「人間関係」についてスピーチをするなどである。

3学期は、研修参加者が両科目の履修選択とコース選択を行うが、その際、カリキュラムの連携と学習効果について履修決定前オリエンテーションを徹底した。

		語彙クラス	スピーチクラス
実施期間		2,3学期	2,3学期
履修時間		2学期:18時間、3学期:14時間	2学期:18時間+発表会、3学期:14時間+発表会
教材		自主制作教材(学習ノート、参考資料、読み物教材)	自主制作教材(テキスト、テープ)
履修者	2学期	31/39名(79%)	21/39名(74%)
	3学期	21/39名(54%) 新聞語彙コース9名、一般語彙コース12名	14/39名(36%) 経済・社会コース8名、文化・社会コース6名
評価		クラスでの活動、学期末レポート	スピーチ発表会でのプレゼンテーション

(表1 語彙クラス、スピーチクラスの概要)

2学期	語彙クラス		スピーチクラス		
週	話題	語形成(接辞等)	話題	語彙・表現	発表技能
第1週	オリエンテーション	的にな	オリエンテーション		
	組織・所属・業務1	外、国、務、員、館、官、省、東西南北	祭り	～的(な) 伝統的、宗教的 ～記念日、～祭りなど	発音、ポーズ、スピード
第2週	組織・所属・業務1	～省、～局、～部、～課～大臣、～長、Nする	地理・民族・宗教	地理(東西南北)、民族(～系、～族)など	スピーチを始める・終わる
第3週	地域協力	N(plural) -化	私と仕事	専攻(～学)、担当(～部・課)など	
第4週	国際連合	縮約形(国連、インフラ等)	観光	観光地(宮殿、～館)、交通、通貨、時差など	写真、地図を使って説明する
第5週	旅行	～内、～外、～め、～先	歴史	政体(共和国、王朝)、事件(戦争、占領)など	年表を作る
第6週	経済協力	～あう	発表の表現	接続詞、敬語	ハンドアウト作成、司会
第7週	政治	～政	個人指導		
第8週	家族	～者、～家、～手、～屋	発表		
第9週	冠婚葬祭	おN	フィードバック		

3学期	語彙クラス	新聞語彙コース	スピーチクラス 経済・社会コース		
週	話題	語形成(接辞等)	話題	語彙・表現	発表技能
第1週	経済1(景気)	～額、～率、～倍、不～、非～	社会問題	～問題、～化、～不足、因果関係をあらわす表現	コンセプトマップを使って説明する
第2週	経済2(貿易)	最～、全～、第～、対～、品詞変換	経済と生活	～費、～率、～者、不～変化をあらわす表現	物価など経済状況について聴衆にクイズを出す
第3週	産業、統計	～業、～別、急～、総～、～高、～等	産業と貿易	～業、～額、～先、～力	統計を使う
第4週	政治(内閣)	～案、～率、(～者)、～論	二国間関係	政治(国交、条約、会談)、経済(投資、援助)など	
第5週	防衛	「貴～」 「わが～」	発表準備		ハンドアウト作成
第6週	マスコミ		フォーマルスピーチ	敬語	
第7週	復習		フォーマルパーティー		

初級からの専門日本語教育のカリキュラム・デザイン

3学期 週	語彙クラス 一般語彙コース		スピーチクラス 文化・社会コース		
	話題	語形成(接辞等)	話題	語彙・表現	発表技能
第1週	感情表現	品詞変換(Adjさ) 擬態語する、不～	人の一生	冠婚葬祭に 関する語彙	エピソードを挿入する
第2週	ことわざと慣用句		社会問題	～問題、～化、～不足、 変化と増減に関する語彙	コンセプトマップを 使って説明する
第3週	料理(味覚)	和～、洋～、～倍	人間関係または 名物料理	名物料理:「料理」 「味覚」に関する語彙	人間関係:ことわざや 慣用句を使う
第4週	民族衣装 (体の部位)	～製、～用、～方	二国間関係	政治(国交、条約、会談) 経済(投資、援助)など	
第5週	擬音語・擬態語		発表準備		ハンドアウト作成
第6週	事件・事故		フォーマルスピーチ	敬語	
第7週	復習		フォーマルパーティー		

(表2 語彙クラス、スピーチクラスシラバス)

3. 評価

3.1 履修状況

両科目とも2学期の履修者数は全体の70%を越えていた。3学期になると履修者数は「スピーチクラス」で36%、「語彙クラス」で54%と減少している。これは「研修参加者が研修の残り時間をにらみながら目標をしぼっている」(上田他 2001)と考えられるが、両科目を履修することの負担は依然として大きいともいえる。しかし平成11年度と比べると、両科目の履修者は増えており、特に語彙クラスでは20%以上増えている。これは「一般語彙コース」を設定してテーマの選択の幅が広がったためと考えられる。また3学期に両科目を履修した9名のうち、7名が連携したコースを選択しており、両科目連携の意図が研修参加者に伝わっていたことがわかる。

3.2 聞き取り調査結果

平成12年度聞き取り調査から、両科目の試みに対して以下の点が観察された。

《興味とニーズへの対応》

履修したすべての研修参加者が3学期の内容によるコース設定について「よかった」と感じていた。また取り上げたテーマについても「日常会話や大使館で働く時に役に立つ」「必要な内容が網羅されていた」と満足していた。

《負担の軽減》

両科目の連携の目的は学習者の負担の軽減にあったが、連携コースを選択した履修者はすべて「連携することで負担が少なくなる」と考えており、特にスピーチで経済・社会コースをとった履修者にその傾向が強かった。また、語彙クラスの内容を「スピーチを作る時、いつも参考にして

いた」と両科目の連携を強く意識していた者もいた。研修参加者にとって学習の成果が見えやすい環境であったと言えよう。一方で「2つの科目をとらなくてもスピーチクラスで語彙も習得できる」と1つの科目に集中することで負担を少なくしようというケースも見られた。

《「選択しない」決定と、継続学習の意識化》

研修参加者の中には語彙クラスの履修者の場合、「新聞語彙は大切だが今は難しすぎるので研修中は一般語彙を勉強して基礎を固め、帰国後新聞語彙を勉強したい」と、研修中の自己目標を継続学習をも含めた長期的展望で設定する者もいた。また「現在の優先順位は一般語彙の方が低いので帰国後勉強する」と意識的に継続学習のため両コースの教材入手を希望する者も数名いた。選択肢の幅を広げたことで「選択しない」ことを積極的に決定し、継続学習へつなげる意欲を持ったことの現れだと言えよう。

《研修参加者によるカリキュラムデザインへの参加》

語彙クラスとスピーチクラスの連携を強調した結果、研修参加者の中には読解と漢字など他の科目との連携を要求する者もいた。これは研修参加者がカリキュラムデザインに参加していることの現れであり、より能動的に研修に参加し、より効果的な日本語学習について自己評価できるようになったことを示唆しているのではなかろうか。

4. 今後の課題

聞き取り調査では、本研修の技能科目連携の限界を示唆する内容の声も聞かれた。語彙クラスとスピーチクラスでは目指す技能が異なっており、提示される語彙は全く同じというわけではなかった。そのため、語彙クラスの〈漢語を中心とした日本語造語力の養成〉という技能の向上を無視しても両クラスで提示する語彙を同一にしたほうが学習効果があがるという声もあった。研修参加者はより負担が軽く、成果が見えやすい日本語の習得を期待していたと言える。しかし、教科間の連携により内容が強調されても、造語力の養成やスピーチの方法という技能の習得は依然として重要である。今後、両科目の共通部分をどのように増やし、技能科目の中で〈内容〉をどのように統合していくかを考えることが必要であろう。

本稿では初級からの専門日本語教育の試みとその問題点について報告した。いわゆるゼロ初級の研修参加者が9ヶ月の研修で職務遂行を可能にする日本語能力の下地作りをするために、専門性をカリキュラムにどのように取り入れていくべきなのか、専門性の中身の検討とともに、提出の時期、量、方法などについて、学習者をインフォーマントにしながら注意深くデザインしていくことが大切だろう。また研修修了後学習がどのように継続されているのか、研修中に設計した継続学習の方向はどの程度現実に即したものであるのかについての追跡調査も今後の課題である。

初級からの専門日本語教育のカリキュラム・デザイン

〔注〕

- (1) 各科目担当者は履修者あるいは履修を途中で辞めたものを含む数名に、自主開発教材、授業等について任意で面談による聞き取り調査を行った。
- (2) 本研修では平成9年度に外交官、公務員の職務的言語能力の目標言語技能 (Language Target Skills) 項目の一覧表を作成し、カリキュラム設計、個別指導、学習目標設定、自己評価などの学習活動の中で運用している (上田、羽太 1999)。
- (3) 外交官・公務員日本語研修の語彙クラスは平成11年度上田、平成12年度和泉元が担当、スピーチクラスは両年度とも羽太が担当した。
- (4) Oxford(1990)は言語学習ストラテジーの1つに「復習を体系的に行うこと」を挙げ、初めは復習時間の間隔をあまりおかないほうがいいと指摘している。

〔参考文献〕

- Grabe & Stoller (1997) Content-Based Instruction : research Foundations. In Snow, M.A. & Brinton, D. M. (Eds.) , *The Content-Based Classroom : Perspectives on integrating language and content* (pp.5-21) . White Plains, NY : Longman.
- Oxford.R. (1990) *Language Learning Strategies*. Heinle & Publishers. 宍戸通庸、伴紀子訳 (1994) 『言語学習ストラテジー』 凡人社
- 上田和子・羽太園 (1999) 「パフォーマンス・チャートの実践 外交官・公務員日本語研修における自律学習 」 『日本語国際センター紀要』 第9号,19-35
- 上田和子・羽太園・和泉元千春 (2001) 「専門日本語教育プログラム・デザイン 外交官・公務員日本語研修における選択システムの実践 」 『日本語国際センター紀要』 第11号,69-87